

パープル

第45号

高村昌憲個人誌



# 目次

---

パープル 第45号 (2014年11月) 目次  
高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

## 詩

森 (2)

——ある日の夢・ポール・デルボー「森の小径」に觸發されて——

中平 耀

変えてはならない

高村昌憲

## 翻訳詩

アラン 『ガブリエル詩集』 (十二)

高村昌憲 訳

五行詩

三月の三行詩

思い出

三月のソネット

## 評論

初期プロポ断想(二十八)

高村昌憲

1 回転テーブル

2 暦

3 役所

4 男女同権主義

編集後記

<表紙の画像は、サフランの花である。>

## 森（２）

—— ある日の夢・ポール・デルボー「森の小径」に觸發されて——

中 平 耀

どこか画廊ふうの部屋で

一人の画家の描いた森の繪を眺めてゐる。

一筋の細い道が森の奥へと伸びて……

……静けさ、清浄な空気、草木の新鮮な匂ひ。

柔らかく濕つた土を踏むのは何とも心地よい。

時折樹々の葉がさらりと身體に觸れてくる。

繁みからは今にも小さな生き物が跳び出してきそうな気配。

時は夕刻。

その暗さの中を眞つ直ぐに貫く道の果てに

さつきから幽かな白い明るみが見えてゐる。

けれど行けども行けども道に終りが無いのだ。

よほど引き返そうかと迷つてゐると、

何の鳥か頭上からしきりに甲高い聲をあげてくる。

——ちよつと來いこつち來い……

——もつと來いずつと來い……

その聲に誘はれ好奇の心も手傳つて怖々と進む。

進むにつれてあたりの深い静寂の中に

次第に靈氣のやうなものが充ちてくるのを感じ、

思はず背筋がぴりりと立つ。

しかしいつになつても到達できないあせりと不安。

いつたい道の先にあるあのほの白い明るみは何か。

あれはきつと森の一切を統べる聖なる領域に違ひない。

すべての存在を包みこむ静謐と平安の中心。

……だが……あの向うにあるのは……

……ひよつとしたら……

現し身では決して立入ることのできない

神秘の異界ではないか、

死者たちの棲む……

——そう思ったら急に畏怖の念が背筋を走った。

親切をして貰ってヤバイと言う男性  
あなたには有難うという言葉は死語  
美しい景色を見てもヤバイと言う女性  
あなたには感動したという言葉は死語

やりもしないのに「吝かではありません」  
そんな口先だけの答弁が通用していたから  
努力を惜しまない意味を変えた電話回線  
真実が消えた流言と虚言が蔓延る路地裏

イギリスでは十四世紀のチョーサー作品を  
中世と同じ言葉で現代の人々も読んでいる  
毎年アカデミー・フランセーズでは新語を  
フランス語として翻訳し国民に示している

円朝や四迷が言文一致の嚆矢と言われるが  
言葉による紊乱は想定しなかったに違いない  
美妙や紅葉も明治文学を庶民に敷衍したが  
国語の崩壊までは予期できなかった文学会

女子高生が遣う言葉が国語辞典に掲載されれば  
日本文化の弾力性であると誇示するテレビ解説者  
言葉が乱れる処に教育は無いと言う哲学者の言葉  
国語ではない国語を示せなくなった学校関係者

ALAIN

*POÈMES À GABRIELLE*



INSTITUT ALAIN

LE VÉSINET

2001

## 五行詩

---

乳白色の霧にあらゆるものの姿は消え  
今朝の私の人生は疑わしい夢想でしかなく  
付近の樹木は白い曙にきらめく  
霧氷が描いている線は傾いて白く  
大地は軽はずみに出た芽を閉じ込めている

しかしながら昨日という日は太陽が殆ど上空で  
燃えていて 弓の射手のように薔薇色の霧を貫いた  
希望の温もりがあらゆるものを愛撫していた  
一羽の鶉が次にくる恋愛のために囁き  
そしてリラの木は陽が長くなるのを感じていた

今ではそれは隠れ家であり眠りであり沈黙である  
私の愛はこの蒼白い放心に燃え尽きていた  
私の手は躊躇して震えて 不安な心は  
この霧の中であなたの何かのしるしを探す  
消えた姿の何かの予感を探している

あなたの倦怠した魂の中には今でも夜がある  
私が見てしまうのはあなたの息と腕の皺  
そしてその上に巻かれたあなたの肉体は  
遠い祖国の未練に目覚めたいと思うことはなく  
私たちの希望は騙され 愛は傷ついていた

「何故考えるの？ 何故なの？ 厳しい掟で  
厳格に完成した世界で 高潔な心は  
狂気だらけの命令を何処で認めるのだろうか？  
私が光り輝くダイヤモンドでできた壁の表面を  
切り取ったりしないのは そんな風に私は望んでいたからだ

あなたを愛していないのか？ 違う もっと愛することなんか  
私には分からない さようなら私一人の恋 私は泣かないのか？  
構うものか もしも門を閉めたなら希望は戻るだろうか？

私の意志は何時も弱い心に負けてしまう  
決して勝者のいない監獄を私は望んでいる

その後で私が期待し愛しそして企てるのは  
侮辱を償うことに結び付ける大空と大地  
私が自分自身に慣れても許せないことがある  
それはあり得ることだ 私は自分の心に身を委ねている  
奴隷でいることを監獄が守っているのも 自由なのだ！」

そんな所は実際には修道院で 馬鹿正直で口が悪く  
その壁を無駄に叩いているのは彼の心だけ  
そして遠くを見定めた眼は確かな隠れ家を見る  
非常にしっかりとした欲望がそれを守り  
額が固くなった世捨て人は貪るように見つめる

あなたも同じだ それしかないなら牢番を騙して  
（それもあなた自身だ！ あなたは自分を縛りたがった）  
あなたは燃えるような両手を浸しに海岸の波間に来る  
冷たい鏡のような水面にゆっくりと波が流れ  
あなたはこの海の中に投げ入れた鍵を捜しに来る

しかし希望の生命力は強く 私を見捨てない  
私は固い大地の下に泉のような音を聞く  
私はもう直ぐ植物の芽が開花するのを感じる  
春が来る 私は優しい息吹を受け取った  
私たちを嘲笑する人が踊る足音を私は聞いている

小鳥がアルペジオの歌声を何度も繰り返している間  
私は雪のひげを付けて笑っている冬を見ている

（ガブリエルのために 一九三〇年二月二四日）

## 三月の三行詩

---

空が暮れる 大地は大きな海綿になる  
それを押し付けて大空は子を産むように重なり  
脇腹からは湯気が出て 好色を夢想する大地

あなたは湿っぽい風と強い香りを感じるの？  
おゝ雌馬のあなたは噛まれる轡のように  
あなたの赤い筋肉は血の付いた猪脰を待っているの？

余りに幸福なのは沢山の毛穴のある大地で  
その襞の中の大きなジュピターに似た者で  
流れるような曙までのゆったりとした長い夜だとあなたは言う

あなたの鼻の穴は良質のエーテルに疲れ  
あなたはそれを崇めていると潮風に言う  
あなたは心を打たれ 火花が剣から発していた

馬になったあなたは 柔らかな砂丘の上を駆け足で跳ねる  
遊びに駆り立てられて野性の馬のように行ったり来たり  
入江の上部に張り出している岩に後脚で立っている

鹿毛色したあなたの胸前 青い雲の上で  
あなたは幻想的なあなたの姿を突然に描き  
燃えるようなたてがみを風の指に委ねている

しかし盲目の大洋がこのイマージュを覆い隠し  
泡立っている何本もの襞には季節がなくなっていて  
その掟はさらに奥深くこもっていて さらに野蛮だ

あなたの呼ぶ声は偉大な歌に消される  
「それは決して歳に分からない青緑色の口づけと  
絶え間なく鼓動する心臓と不毛の大空を愛するの？

欲望よ あなたはこの大洋のように戻ってくる

私の血の付いた丈夫な細長い皮ひもにすり減るの？」  
こんな風にして別の海岸では美しい女囚人がいる

時々は体を揺らし 虚無という狂人  
大きく口を開けた深淵の際限のない息をする本  
後脚で立つ愛と褐色のたてがみ

(ガブリエルへ 一九三〇年三月一〇日)

## 思い出

---

あちらこちらに生える松の木と荒野の彼方に  
私には大空に愛される前兆が見えていた  
惜しげもなく撒かれた澄んだ水と光  
樹木も収穫物もなく広大な広がり  
この小丘は傾いている 広々とした雲は  
浜辺のふわふわとした波を現しており  
金色の海岸線には美しい銀色の縁  
崇められた約束と沈黙と孤独  
私の待ち切れない心が生んだ幻想

しかしながら私はあなたの笑い顔を探した  
それは私が期待したことであり 私の思想の続き  
やっと波間に鷗が何羽も見える時  
この柔らかな大海原を前にして疑う  
一瞬のイマージュの結び目を解きながら  
もしもそれが翼の白さとか泡の白さであったなら  
一つの動きにも私が見ていたものは  
輝いている霧 きらきらと光が反射する海  
ゆったりとまどろむ波と飛んでいるような蜃気楼  
力強い波の将来を予言しながら そして  
繋がれている小船は小刻みに震えている  
何本もの松を愛撫する水の鏡になったあなた  
おゝ私の渇きよ 塩分よ！ 私の饗宴の〈女王〉  
私の涙と喜びの泉でできているのは大洋.....

そんな風にあなたは絹糸のようなおかつぱ頭で私を見る

(ガブリエルへ 一九三〇年三月一七日)

## 三月のソネット

---

太陽は毎日昇ってきて 年は回る  
もっと早く もっと長い日を見付けながら  
金色の縁飾りで小枝が飾られて  
遠くの霧が輪郭を震わせている

それは笑っている春 希望 愛  
それは下を向く人々に冠を被せている花  
それは新年のお祝いを歌っている歌  
それは永遠の陶酔と永遠の繰り返し

あなたの春 私の花よ！ あなたの眼は清純な泉  
新鮮な自然が呟いている水の流れ  
悲しいかな！ 映しているのは他所の木々と大空

よそ者の視線には新しい曙の感動がある！  
私の心よ 期待の中で眠れ 両眼を閉じよ  
過ぎた春に向って 何故ならまだ冬だから

(ガブリエルへ 一九三〇年三月二四日)

## 1 回転テーブル

中華料理店などで眼にする回転テーブルは、考えて見れば社会の縮図のようなものです。誰かの手が右へ回転させようとする、他の人の手がそれを助けようとして同じ様に右へ回転させようとし、しかし、何もしないで只見ている人もおります。その回転テーブルに座る人々の想像力は平等ではありません。そして、私たちの行動が想像力に従っているのもどうしようもない、とアランは一九〇八年五月二日のプロポで書いています。「例えば指を上げるのと同時に、下げることは想像するのも全く不可能です。それ故に私はテーブルが回転し始めるのを期待する時、つまりテーブルが回転するのを想像する時、うっかりして私はテーブルを押します。立会者全員が平等に想像力を生き生きと持っていませんし、平等に固定させる能力も持っていません。それ故に彼らは、或る時は一つの動きを想像しますし、又或る時は別の動きを想像します。その結果、先駆者の震えを全ての人が熱心に指摘します。続いて、彼らの中でもっと頑固な想像力を持っている人が、その動きに一つの意味を与えますし、指の先から全ての人が見抜き、動きの概略を想像します。その時はテーブルがワルツを踊り始める時です」。

実を言えば、社会の動きも一人ひとりが判断して行動することは稀有なことです。独りの首相の想像力のみによって、社会という回転テーブルを右に回り出すと、独りの首相の想像力に沿うように動き出すことは十分に考えられます。取分け官僚たちの思考形態は長年の習慣によって、自ら思考し判断するための抵抗力を喪失していますから、首相の想像力を様々な社会の規定に整合させるための理論武装に邁進します。意を汲んで思考し行動することが、優秀な官僚と見倣されて行きます。一度回転テーブルが動き出すと、皆が一つの意味をそこから汲み取ります。料理を一人ひとりに運ぶことであったなら、その意味を汲み取ります。仮に〈集団的自衛権〉という料理を運ぶことであったなら、それと逆の動きをとることは想像しなくなります。ところがアランが反対の回転を想像すると、想像した方向へ回転して行くこともあるのでした。回転テーブルに指を触れて反対の方向へ力を入れるためには、やはりその方向への回転を想像することで始まるのです。「殆ど全ての場合に私（アラン）は、想像した感覚でテーブルが回るようになります。想像力の結果によって、全ての場合に私が反対の回転を想像した瞬間に、そのテーブルは乱れ、震え上がり、停止し、屢々私が想像した方向へ新たに從って行くのでした」。

その時、一人の協力者がいればより早く新たな方向へ回転して行くことでしょう。一生懸命に手に力を入れて新たな方向へ回転させる人は、混乱を招くだけです。同じテーブルに着いている人々に了解を取り付ければ、もっと容易に回転させることが可能になりますから、予め前口上としての言葉で説明して納得して貰うことが重要になります。「...もっと決定的なのは前口上を操作した時のことでした。私はその時、目的とした前口上は大変に弱い一本の指を動かしながら、私の意に誠実ではっきりと理解して適用してくれた一人の協力者に満足することが出来ました」。

力尽くで行動するだけでは上手く行きません。右回転のテーブルを左回転にするのですから、そこには当然に皆の理解が必要になって来ます。そして、先ずは右回転を停止させることです。〈集団的自衛権〉の社会の動きも、先ずは停止させることです。幼稚なナショナリズムに基づく団結力は想像以上に強力ですから、先ずは冷静に思考し判断する環境を提供することです。情熱に言葉を預けてはいけません。情熱は競うことから容易に湧出して来ますが、味わうことを忘却します。例えば走りながら物を食べても味わえませんから、食べる時は必ず肉体を静止させます。もっと正確に言うなら、肉体と同様にテーブルが回転している時も、味わうことが疎かになって仕舞いますから、テーブルの回転を停止させようとしします。回転を停止させる方法は一つしかありません。それは皆がじっくりと料理の味を楽しむことです。テーブルが回っていては落ち着いて食べることが出来ません。

〈集団的自衛権〉の話も、戦争の話も、余り夢中にならないことです。日本という国、米国という国、中国という国、韓国という国、そしてあらゆる国を良く知り味わう努力をすることです。〈集団的自衛権〉の話だけに固執しようとする思考は、その国の全てを良く知ることは不可能であり、その様な人々にとっての社会も面白くない筈です。その国を良く知るためには、その国の言葉を勉強することも大切ですが、それ以上に実際にその国を訪問することも効果的です。それが味わうことに繋がる筈です。自然と国際交流が生まれて来て、テーブルも左回転に回り出すに違いありません。右回転の時は強力な指導者が必要だったかも知れませんが、左回転の時はそれ程強力な指導者は必要ではありません。市民の豊かな想像力が自然な力となって、一人ひとりの指先で回転させて行くことが可能になります。

(完)

社会の中で生活する私たちは、時間を何時も気にしています。反対に、ロビンソン・クルーソーのように独り無人島で暮らすようになると、時間を気にすることは少なくなります。それ程極端な状況を想定しなくても、似たような経験は誰でも持っていると思います。例えば、都会から田舎へ行って暫く暮らした時も、似たような経験を持ちます。あるいは休日のため、サラリーマンが出勤しないで良い日の朝も、時間を気にしないで済みます。時間を気にする度合いが少なくなればなる程、社会との関わり合いも小さくなるのかもしれませんが。一九〇八年五月五日のプロポの初めに、アランは時間のことを次のように書いています。「日、週、月、年を数えるのは大変に簡単のように見えます。何故なら、私たちは社会の中で生活しているからです。何処へ行っても至る所で、時間を小刻みに細かく切る時計の針を眼にします。小ポケットには懐中時計があり、無意識に時間を見ます。この様にして私たちの想像力が、流れる時間から顔を背けることは決してありません。一日の各瞬間でも、私たちは何時何分なのか分かっています。そして、夜に目覚めても、時間や時刻のことを直ぐに考えます。私にはチクチク、タクタク、トクトクと音を出す懐中時計や置時計や掛時計があり、まるで何本もの糸で時間の巣を張っているようです。私の傍にある掛時計は、タペストリーの大輪の花のようであり、一時間毎に大きな音を出します。その上、十五分経ったことも私には分かります」。

ところが日や月のことは、都会で暮らす人も田舎で暮らす人も、同じ様に気にするようです。何故なら、種蒔きや収穫などを行う農業の仕事には季節が重要になってくるからです。無人島で暮らしていても、今日は何月何日であるのか、必ず認識しようとする筈です。しかし、ロビンソン・クルーソーのように独りだけで何年も暮らし、外部からの情報が一切得られない場合は、今日が何月何日であるのか、その認識が怪しくなって来ます。アランは書いています。

「日々を数えるのに、懐中時計は殆ど使いません。しかし皆は数えており、その数え方は沢山あります。家計を計算する主婦は、或る種機械的に日々を数えます。というのもお腹が減ると食欲は間違いなく生じるからで、食べることや飲むことが忘れられることはありません。公務員の計算も日々を正確に数えます。それはお金という砂を流す砂時計のようなもので、流れて行くにつれて月になります。会計係は、全て帳面に日々を記載して商売をします。更に日々には記念日の名前が付けられ、記帳は数珠のように繋がって行きます。何かがその請求を邪魔するとしても繋がります。... (中略) ...もしロビンソン・クルーソーのようであるとか、少なくとも自然の中にいて町の中にいないとすれば、私たちは日々を数えるのに大変苦勞するでしょう。それというのも小石に日々の印を付けて行くのは、間違いを犯し易いからです。孤立した人間の記憶は、躊躇するばかりで迷って仕舞います。私は全ての日々を付けたのでしょうか、あるいは付けなかったのでしょうか。孤独な人間には解けない疑問です」。

時間を抽象した月日の正しい認識は、社会と共に可能になると言えます。この様にして暦（カレンダー）は、社会との関わり合いそのものでもあります。社会は時間を抽象します。ベルグソンが言ったように、抽象された時間は、カレンダーのように空間化されます。時間を知性によっ

て抽象することによって、社会の共通項を産み出します。従って、そこから抜け落ちたものを想像する行為も、実は社会にも個人にも必要になって来ます。過去に対しては〈歴史〉になり、未来に対しては〈計画〉になり得るものです。しかしアランの思想は、現在を抽象化した儘では決して許さないものでした。つまり現在を感じる行為と思考する行為を、恰も暦の中で合体させていたかのようでした。

「潮の満ち引きに時間や月を読むことでしょうし、太陽や星々や、取分け月の規則正しい満ち欠きの繰り返しは、驚く程の月々を数えています」。〈孤独な人間〉は、何とか自力で正しい暦を見出そうとします。そのための暦として太陰月が採用されたのである、とアランはこのプロポの結びに書いています。そして「赤い月は花にとっては恐ろしいと農家の人々が言う時、秋分の日から始まる太陰月は夜が寒くなると言いたいのです。しかし、夜を寒くするのは月であると言いませんし、そのことを考えもしません。彼らはそんなにも愚かではありません」と書いて、このプロポを結んでいます。

月是指標でしかありません。実のところ、指標が事物の原因になるのではありません。この場合の原因は太陽です。ところが太陽のことをすっかり忘れて、月が夜を寒くするのである、と錯覚することは意外と多いのです。温度計が高いから暑いと思えば、湿度が低いから木陰では涼しいのです。中国の船が日本の船にぶつかって来るから戦争になると思えば、私の友人のように北京で日本語を教えている熱心な日本人もおります。韓国の手電機会社や自動車会社の製品は世界中を席卷していると思えば、その資本の半分以上は外国資金であるため配当金などで多くの利益が国外へ流失しているようです。更に労働者は低賃金です。失業率も高く、実質的には五人に一人は失業しているとのことです。

(完)

### 3 役所

---

フランスの郵便局へ行くと、絵葉書一枚出すにも、列に並ばなければなりません。各人の用件は区々であると思いますが、時間がかかりそうな人もそうでない人も同じ列に並ばなければなりません。従って、誰もが自分の順番が来るまで辛抱強く待っています。窓口の郵便局員が数人で全てを熟しています。奥にも局員がいるのですが、列に並んでいる人に対応して手を貸そうとする局員はおりません。当然と言えば当然ですが、もう少し効率的に捌いてくれないものかと苛々した経験があります。

同じ様な経験は、シャルル・ド・ゴール空港の売店でもありました。私は飲み水を一本買うだけでしたが、色々なパンを選んでから温めて貰う人も同じ列に並んでいましたから、なかなか順番が来ません。そのうちに新しく黒人女性の店員が一人増えました。すると私の後方にいた米国人らしき男は、待ちきれずに新しい店員の方へさっと思いましたが、順番を守るように諭されていました。あくまで従前の列の順番どおりなのです。黒人女性の店員のその毅然たる態度は、列に並んでいる他の人々の権利をまるで守っているような印象を受けて、或る種の爽やかな風のようなものが流れているように感じました。しかし、それにしても何故フランス人は効率が悪いのでしょうか。まるで役所のような仕事ぶりです。一九〇八年五月六日のプロポでアランは書いています。

「役所は、あべこべで非常識な世界です。役職が上がれば上がる程、力がなくなり、責任は大きくなります。軍隊では、上等兵が全てを行います。事務所では、最終の発送係が全てを行います。彼らの上には伍長がいて、軍人とか市民がおり、その仕事は次の二つの言葉の中にあります。監視することと、要約することです。その上には監視する人を監視したり、要約する人々を要約する人間たちの階級制度というものがあります。

事件というものには関係があります。官僚は、十ある関係を一つに凝縮することが仕事と見做しています。このやり方によって、十の関係が一つに合併させられます。各々の独自の性質が失われます」。つまり、〈各々の独自の性質〉を斟酌しないことが公平であるようです。飲み水を一本買う人も、パンを選んで温めて貰う人も、買う順番としては同じ列の中で抽象されて同一のものと見做されます。兎に角、早く並んだ人が早く買うことが出来る制度が、厳然と確立されているのです。

しかし、アランはそこに平等主義の欠点も認めています。購入する結果ばかりを見ないで、どういう理由で購入するのかその原因も見なくてはいけないのです。原因によって公平を確保する方法も必要です。

「複数の事件を同時に記述したくなるや否や、内容の無い型に嵌まった表現に陥ります。主義主張は無くなります。

統計の美德とはそういうもので、お役所的報告書の典型です。例えば百件の火事のうち三十件は放火で、五十件は過失で、二十件は工場からの出火であると私が言う時、そういうことを私が言っても何にもなりません。何故なら放火や過失には色々な場合があり、色々と異なった原因

が多くあるからです。これらの内容の無い報告書は、曖昧な法則によって表され、笑って済ますしかない上等兵まで段々と降りて来ます。

その原因を把握し処方箋を見付けるために、自分から動いて事件まで行かなければなりません。自分の仕事に精通していない警視總監は、その騒ぎに関する報告書の作成を自分で行いません。彼はそこまで走って行き、命令を出します。そして、その交差点で車が衝突するかどうかを知るために見に行きます。このやり方は少しずつ行われて来っていますが、役所ではそれに抵抗して、上司の監視と行動の間で無駄なことが行われています。以上は、管理することが難しい理由です。物事の自然な流れによれば、権力と行動は切り離せません。杓子を持つ者は、スープを作る者でもあるのです」

と書いてこのプロポは終わります。

先程の黒人女性の店員に話を戻します。この店員の公平さは、それなりに爽やかなものでしたが、やはり列に並んでいる人々の〈原因〉に基づいた処理の仕方を創意工夫すべきであった、とアランなら言うだろうと思います。即ち、パン以外の物だけを購入する人だけに対応することです。「その原因を把握し処方箋を見付けるために、自分から動いて事件まで行かなければなりません」から、出来れば列の中に入って行って、短時間で処理出来る人だけを選別して、その人たちの列をもう一つ作ることだったのです。〈米国人らしき男〉がとった行動も、とっさにその合理性を感じ取った結果のものであったのだろうと思います。

しかし、パンを買う人々にとっては黒人女性の店員の〈恩恵〉は余り受けられなくなります。購入出来る順番という結果だけを見た公平性か、原因となる〈杓子〉を見ての公平性か、〈正義〉であるためのその選択は一筋縄では行きませんが、行動には権力が自然と結びついているとアランは言っています。〈米国人らしき男〉がとった行動が、実は世界中の多くの紛争の元になっているようにも思います。原因ばかりを見ようとするために、戦禍という結果であるスープの味が非常に不味くなっている場合が多過ぎるように思います。スープの味が不味くなった時は、暫くは誰にも分かり易い結果の公平性を尊重して、原因ばかりを見ないで、皆が少しずつ我慢して一列に並ぶことが〈正義〉に繋がる場合もある筈です。

(完)

## 4 男女同権主義

---

二十一世紀の我が国日本も、男女同権について様々な考えや意見が公表されていますが、大きく分けて二つに分類されるようです。一つは、肉体的物理的側面からの相違を除いて、全ての面において平等であるべきとするものです。もう一つは、肉体的物理的側面の外にもお互いの長所を重視して、それに相応しい活動をすべきであるとするものです。前者の考えは女性が多く、後者の考えは男性に多いようです。ところが女性でありながら、後者の考えを持つ者がいることもアランは一九〇八年五月八日のプロポで紹介しています。次に述べるのは、フランスの当時の婦人参政権論者の女性の意見です。

「女性たちの要求は少し滑稽と思います。自立した女性は或る種の怪物なのです。その女性は生まれた儘の自然に従っているのです。彼女は保護され大事にされる必要があります。子供の面倒を見るという役割の他に、もしも彼女がそのことを幸福に思うのであれば、彼女の自然な役割は家庭を美しくするでしょうし、それは男性がそこに喜びと安らぎを見出すためでもあります。あるいはこう言った方が良ければ、それは奴隷の仕事です。しかしこの奴隷の仕事は、もし余り愚かでないならば、彼女を女王にします。説得力や微笑や阿諛や幾らかの自尊心によって支配しますが、それは彼女の最も貴重な化粧でもあります。そして、彼女には産婆とか電話交換手には決してない実際の自由を多く持っているとして強く信じて下さい」。

確かに、〈平等〉には自由を不完全なものにする側面があります。その良い例は労働時間です。近年まで我が国も、女性の午後十時以後の深夜労働は原則として禁止されていましたが、男女平等の原則に基づいて法律が改正され、女性の深夜労働も可能になりました。その結果、終電で帰宅する女性の人数も多くなり、お花やお茶を習う時間もなかなか見付からないようです。ところが、そのうちに男性から求婚されれば、女性は「家庭を美しくする」ことに励み出し、男性もそこに「喜びや安らぎ」を見出すことでしょう。そして女性の仕事は奴隷の仕事であっても、女性を女王にします。家庭という城壁の中で、全ての実権を握るようになり、「実際の自由」を手に入れます。〈平等〉に氣をとられていたなら、決して手にすることのなかった自由であり、まさに幸福な女性になりますが、そのためには夫や子供や自分自身への「説得力や微笑や阿諛や幾らかの自尊心」が必要です。決して無垢な心ではないそれらは、「最も貴重な化粧」である、とアランは言います。〈平等〉を熱心に求める無垢な心には無い、大人の女性としての〈化粧〉が女性を美しく見せるのです。大人には大人の幸福があり、幸福であればそれで良いと男性たちは言うことでしょう。

しかし、その様な幸福な女性ばかりではありません。アランは言います。

「しかし、全ての女性があなたと同じ様に幸福ではありません。全ての女性がそんなにも優しい男性と一緒にすることはありません。多くの女性はその様な幸福にはなれません。多くの女性は自分の心に忠実になりたいでしょうし、愛されれば愛される程、愛したいと思うでしょう。多くの女性は実際に一緒にになりたいと思いますし、愛を受ければ受ける程、与えたいと思います。多くの女性は、彼女の主人が支配している奴隷としてのこれらの策略を軽蔑します。以上が、も

しも彼女たちに財産が無かったならば、財産を得るように仕事をしたいと思う理由になるのですが、それは彼女たちが期待したり、選択したり、夫を追いかけないでいるようになれることなのです。そういうことは課長とか経営者とか顧客との依存関係の中に身を置くことであるのは、大変に明白です。少なくとも彼女たちは自分の課長たちを愛する必要がありません。彼女たちの仕事は決して気に入ったものではありませんが、要するに彼女たちは遊女というものには決してなりません。女性はそのことを望むことが出来ますし、私は滑稽ではないと信じています」と書いてこのプロポを結んでいます。

この様にして、女性が何時までも幸福であり続けることは不可能です。従って、何時までも「養われている女性」として存続出来る保証もありません。課長や経営者や商店主となって働く必要があります。それらの仕事は、お茶やお花のように優雅で上品な振舞いではなくなりますが、「夫を追いかけないでいるようになれること」であり、自立した思考が出来る個人として、社会のあらゆる面に意見を述べる権利を手に入れます。真の民主主義社会の前提になり、所謂共和制社会の基本的な生活態度を生んで行きます。何故なら夫に「養われている女性」であったなら、夫の上司や社長へ正当な意見であっても言うことはまず出来ないからです。天皇制とか君主制とか封建制にとっては、連帯責任が必須であるからです。妻には当然のことのようには夫との連帯責任が課せられます。

又、会社や団体などの我が国の組織には、殆どが精神的天皇制があり、精神的君主制があり、精神的封建制が巣くっています。個人には真の自由が抑えられます。つまり連帯責任の思想が、チームワーク、協同、目標、活性化などという観念の影で根を張って行きます。まさに初めに組織ありきの思想に雷同して行き、幸福という化粧をした平等の思想が生活の味付けをして行きます。しかしそこに真の自由は無い、とアランは言っているのです。女性が真の自由を手に入れるためには、二輪車にならないかならないようです。女性にとっての現代は、未だ男性のように何もしなくても立っていられる四輪車であってはならない時代なのかもしれません。つまり男女同権を意識し唱えて前進し続けなければ、多くの女性は自立して立ってられない時代なのかもしれません。「実際の自由」よりも真の自由を求めて絶えず前進することが、個人としての真の幸福へ繋がっているようにも見えます。そこからは、組織の意識から離れて、愛されるから愛するのではない自発的で自由な真の愛の姿が見えて来る筈です。

(完)

◆五月三十一日（金）に大阪・池田のギャルリVEGAで開催された「高村喜美子作品展」を鑑賞した。小品ながら人物画あり、静物画あり、風景画ありの作品群はまさしく絵画の遊歩道のように楽しくさせてくれる。モチーフが多様であっても、やはり独りの画家の画風というものが自然に表れているから不思議である。恐らく、個性を意識しなくても真実を真摯に描くという行為を実践すれば、自然と独創性は湧出して来るに違いない。人が河を渡るために造られる橋の必要性や機能性を忘れたかのように、橋桁や欄干が大袈裟な装飾のパリのセーヌ河に架かるアレクサンドル三世橋を醜悪であると非難したアランが言うように、芸術の美とは見た目に美しそうな装飾だらけで小手先の技術で誤魔化す虚飾にあるのではなく、必要性や機能性の中から簡素化されながらも自然と湧出して来るところにも美の側面があるのだろう。余りに多様化された現代芸術においても、何のために何処で必要にされる作品か、これらの基本的な問題について、人間の生活上の観点からもう一度検証してみる芸術家の思考も重要ではないかと思っている。

◆七月十四日（月）から二十五日（金）まで早稲田大学名誉教授のI氏と二人でチリを訪問した。成田を出発して、パリのシャルル・ド・ゴール空港で乗り換え、サンティアゴのアルトゥロ・メリノ・ベニテス国際空港に到着するまで三十時間の長旅であった。タクシーで旧市街のホテルへ直行したが、途中でアンデスの山々が見えて、チリへ来たのを実感した。九日間の滞在中に主に行ったことは、①日智文化協会の会長で日本語学院校長のマリア・クリスティーナ・ペレス・デ・アルセさんを訪問したこと。②同じく同協会の理事で日本歴史文化講師のアリエル・タケダ・メナ氏ご夫妻たちとの夕食会。③サンティアゴ市内から東へ百キロ程の太平洋沿岸に位置するビーニャ・デル・マルの町を訪問したこと。④同じく同距離程のバルパライソの町（港の丘に建つ住居群は世界遺産）を訪問したことであった。その他に、これは偶然であったが好運にもサンティアゴ市内の国立劇場でラフマニノフの「悲しみの三重奏曲」とショスタコヴィチの「ピアノ五重奏曲」を聴く機会を得た。異境で聴くアンサンブルの調べは格別であった。それにしてもチリは、選挙によって世界初の社会主義政権を樹立した国であり、その後クーデターにより軍事独裁政権に国民は長く苦しめられながらも、一九八九年十二月の選挙で再び自由を獲得して今では南米で最も安全な国のようである。

◆八月三日（日）に東京・吉祥寺の「永谷SPACE」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）の講演会「石原吉郎と立原道造」（講師・郷原宏氏）に出席した。当初、演題の二人の詩人に如何なる共通点があるのか、正直に言って怪訝な顔をした人も多くいると思うが、郷原氏の講演を聴き終わると合点がいったことを先ず書かなければならない。つまりシベリア抑留から復員した詩人・石原吉郎が、抑留中から日本への望郷と美しい日本語を憧憬した詩人として、最も愛していたのが立原道造であったと郷原氏は語るのである。石原吉郎は、過酷な環境の中で長く抑留されていたにも拘わらず、殆ど政治的イデオロギーへ接近することのなかった稀有とも言える詩境を守ったことに触れ、その萌芽のための例証として石原吉郎初期詩篇の「石」「雲」「裸火」や林英夫氏宛の葉書に書かれていた無題の詩（一九五四）などを郷原氏は挙げている。それと共に立原道造詩集『萱草に寄す』から「わかれる昼」などを朗読されて、まさに石原吉郎論

が書かれた一冊の評論集の朗読に立ち会っている感じがした。実際に、生前の石原吉郎と親交のあった郷原氏でないと語れない逸話に溢れていた貴重な講演会であった。因みに、晩年の詩人は大変な大酒飲みであつたらしいが、その原因の一つが政治的イデオロギーへ赴かなかったためであると勝手に推察するなら、イデオロギーを斟酌しながらも生活を犠牲にしない詩人の生涯の方が潔いのではないか、とこれも私は勝手に考えた。

◆八月二十一日（木）に「風狂の会」が編集する電子書籍の同人雑誌「風狂」を発行した。ブックログのパブーの「電子書籍作成・販売プラットフォーム」から無料で検索出来るので、こちらの方もご高覧戴きたい。（完）

高村昌憲個人誌 パープル (第45号)

(2014年11月21日登録)

<http://p.booklog.jp/book/91296>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91296>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91296>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ